

第九章 文学史の流れ

1 叙事詩

二大叙事詩の批判校訂版

インドの二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』は、その成立以来、文学、芸能、美術などのみならず、宗教、思想、社会規範の面でも南アジア文化の一大源泉となつている。一九九〇年代に両叙事詩がインドでTVシリーズ化されたときには大人気を博し、現代においてもその影響力が衰えていないことを如実に示した。ここではヴェーダ文学につづく文学史の流れを、この叙事詩から始めたい。

『マハーバーラタ』はその補遺とされる『ハリヴァンシャ』を含めて一〇万詩節、『ラーマーヤナ』は二万五〇〇〇詩節といわれるように、両叙事詩は膨大な文献である。伝承では『マハーバーラタ』の作者はヴィヤーサ、『ラーマーヤナ』の作者はヴァールミキとされるが、現実には非常に長期にわたつて、多くの人びとの手をへてしだいに形成されていったものである。したがって両叙事詩の形成過程を考えるには、作品を成立層に分けて研究する必要がある、そのためには現存する膨大な量の写本群を基にした批判校訂版が必要不可欠である。これはインド共和国独立後の一大文化事業として結実し、『マハーバーラタ』と『ハリヴァンシャ』はプーナ(プネー)のバンダルカル東洋学研究所(一九三三)

六六年、『ハリヴァンシャ』は六九〇七年）、また『ラーマヤナ』はバローダ（ワローダラー）の東洋学研究所から（一九六〇～七五年）、おのこの批判校訂版が出版された。この版は両叙事詩の伝承が地方ごとに分岐する以前の状態の復元をめぐらしたものであり、復元されたテキストはほぼグプタ初期段階に北インドに存在したものに相当する。グプタ期以降、叙事詩の伝承は南アジア全域に広がり各地方で新たな物語の付加などの増広、改変を受けることになるが、そうした発達過程については、この版に補遺として付加されたテキスト断片群などから推定することができる。

批判校訂版の出版後、両叙事詩の研究は飛躍的に進歩した。言語・韻律・定型表現などを分析して、復元されたグプタ初期段階のテキストをさらに成立層に分けて形成過程を分析する研究が進み、まだ不明な点も多いとはいえ、おおよその形成過程は明らかになってきている。ここではまず両叙事詩に共通する形成過程の概略を述べよう。

叙事詩の古層

両叙事詩ともに、その中核となるのは王族の戦いの物語である。『マハーバーラタ』の場合はクルの地（ドーアープ地方）を舞台とするクル族の従兄弟同士であるパーンダヴァ五兄弟とカウラヴァ百兄弟のあいだの王位継承戦であり、『ラーマヤナ』の場合は、猿の軍勢と同盟したコーサラ国の王子ラーマと彼の妻シーターを誘拐したランカーの羅刹の王ラーヴァナとの戦いである。この戦記に、その発端と勝利者が王位に就く結末とを加えた「バーラタ物語」と「ラーマ物語」が、両叙事詩の各最古層を形成する。この最古層に描かれる社会は、『マハーバーラタ』の場合は北インドの西部中心、『ラーマヤナ』の場合には北インドの東部中心という相違はあるが、ともに複数の部族・地域にまたがる王国が出現する以前の部族社会であり、ヴェータ時代前期の社会状況を反映していると思われる。

バーラタ物語とラーマ物語はこの時代に、おそらく吟唱詩人たちによってさまざまなかたちで歌われ、しだいにまとまったかたちになっていったのであろうが、現在伝えられているような叙事詩の古層のかたちに編纂されたのは、

前五世紀以降のことではないかと考えられている。言語はパーニニがその文法を体系的に記述した言語、すなわち前四世紀頃の北西インドの古インド・アーリヤ語とほぼ一致するが、文法の細部では異なる点多々あり、一般に「叙事詩・サンスクリット」と呼ばれている。その文法はパーニニに比べて許容範囲が広く、両叙事詩を伝承・編纂した詩人たちの活動が北インドの広範囲におよび、地域的な文法の差異を包摂していったためではないかと思われる。韻律は主として一脚八音節の偶数脚（基本形は四脚）から成り、ヴェーダ文献に用いられた韻律を継承している。こうした言語・韻律は両叙事詩にほぼ共通するが、定型句に関しては古層では異なる特徴が見られるため、各叙事詩の古層の形成・編纂にかかわった詩人たちは別個のグループであったと思われる。

両叙事詩の中核となるバーラタ物語・ラーマ物語の形成・伝承、かつそれにつづく現叙事詩の古層の成立はヴェーダ期に相当すると述べたが、にもかかわらず、叙事詩の主要登場人物への言及らしき記述はヴェーダ文献にはわずかしかない。これはおそらく、祭祀を司るバラモン（ブラーフmana）たちを担い手とするヴェーダ文献に対し、叙事詩の古層の形成・伝承は異なる社会階層、すなわち武人（クシャトリア）階層と彼らをパトロンとする詩人たちに属していたためであろう。『マハーバーラタ』ではスータと呼ばれる詩人たちが語り手として登場するが、彼らは戦場では高位の武人の戦車の御者でもあり、戦いに臨んで歌で戦士の意気を高めると同時に、帰還後は御者として目撃した武人たちの戦い振りを新たな英雄詩に歌ったのであろう。『ラーマヤナ』では、新層部分にラーマの息子クシャとラヴァがヴァールミーキのつくったラーマの物語をラーマ自身の前ではじめて歌ったという挿話があり、これはクシラーヴァと呼ばれる遊歴詩人・芸人のグループが、ラーマ物語の形成・伝承にかかわったことを示唆している。ただし、『マハーバーラタ』の古層の構成については、ヴェーダ文献に伝えられる王の即位儀礼の構成を基礎にしていることが指摘されており、ヴェーダ文献と叙事詩の古層とがまったく無関係であったわけではない。

英雄詩から倫理・信仰の書へ

両叙事詩の古層の性格は基本的に「英雄詩」と呼ぶことができるが、つづく時代に叙事詩の形成作業は武人と詩人たちの手からバラモンの手に移り、このことが叙事詩の性格を大きく変えることになる。これがいつ頃のことか確定することは難しいが、マウリヤ期からクシャーナ期のあいだであることはほぼ確かであろう。この時期には両叙事詩の相互影響関係が強まり、共通する定型句や詩節が見られるようになる。この時期に古層に付加されたのは以下の部分であるが、付加の順序は定かではない。

まず、主要登場人物の祖先から彼らの誕生・結婚にいたるまでの経緯を述べる前史と、勝利者が王位に就いてからの後史が古層の前後に付加された。また、その多くがヴェーダ文献に知られている神話や伝説が、全篇にわたってあちらこちらに挿入された。バラモンのなかでもブリグ族がこの付加に大きな役割をはたしたという指摘もあり、そのなかにはバラモンのクシャトリアへの優位を語る神話・伝説が多く含まれている。神話のなかでは、クリシュナー・ナーラーヤナ・ヴィシュヌ神と、ルドラ・シヴァ神が二大神化していく過程が見てとれるが、その背景には、この二柱の神を他の神々とはレヴェルを異にする最高神とする一神教的な信仰形態の発達がある。

とくに『マハーバーラタ』において、さまざまな教説、とくにダルマ(法)をめぐる教説が付加され始めたのもこの時期であろう。そこには仏教やジャイナ教で発展した業・輪廻、不殺生、解脱などの考えに基づく新しい人生観をヴェーダの祭祀主義と融合させたいうえで、バラモンを指導的地位にすえた社会秩序を確立しようとする意図を見ることが出来る。またヨーガやサンキヤなど、のちの南アジア思想の理論と実践の基底となる教説も断片的に述べられている。さらにクシャーナ期までには、宇宙の創造から人類の始祖をへて、バーラタ戦争の英雄たちと彼らの子孫の系譜を含む、「プラーナ(古伝承)と呼ばれる伝承も、『マハーバーラタ』の「補遺」として作品化され付加されたようであり、これが『ハリヴァンシャ』の古層となる。複数の聖地巡礼の記述が『マハーバーラタ』に挿入されたのは、この時期か、あ

るいは少しあとになるかもしれない。これらの記述は、叙事詩の地理的認識が北インドから半島部全体へと広がったことを示している。

ヤードヴァ族の指導者クリシュナは、『マハーバーラタ』の古層ではパーンダヴァ五兄弟の参謀であり、彼らを戦争と勝利へと導く要の人物である。このクリシュナとその親族である英雄たちは、前二世紀頃までにはすでに信仰の対象となっていた。一方、ヴェーダ文献にあらわれるナーラーヤナ神は、ヴェーダ後期には造物主ブラジャーパティやブラフマー神などに帰せられていた創造神話を取り込み、特別な信仰の対象となっていたらしい。このナーラーヤナ神とクリシュナ、さらにヴェーダの初期からよく知られているヴィシュヌ神がしだいに融合して一柱の神格となり、この神格を最高神とするバーガヴァタ信仰が成立した。その過程の詳細は不明であるが、時期は『マハーバーラタ』の古層にさまざまな要素が付加されていく過程とかさなり、その過程で英雄クリシュナはしだいに神格化されていく。かくて、クリシュナ・ナーラーヤナ・ヴィシュヌ三神の統合の結果として複数の創造神話が包摂され、それらを互いに調和させるため、一柱の神が世界の歴史の異なる時点に異なる姿で顕現するという考え方が成立した。さらに人間であるクリシュナは、この神の人としての地上の顕現と見なされるようになった。その結果、他のさまざまな英雄たちもこの神の人としての化身とされ、『ラーマーヤナ』の主人公ラーマもまた、この神の化身として神格化された。

前述のように、『マハーバーラタ』におけるクリシュナの神格化はかなり早い時期に始まっていたが、クリシュナとラーマを明確に神の化身とする記述は、批判校訂版に復元されたテクストのなかではもともと新しい層に属すると思われる。これに該当するのは、バーガヴァタ信仰を説く『バガヴァッド・ギーター』、この信仰の一派であるパンチャラートラ派の初期の教義を説くナーラーヤニヤ章、『ラーマーヤナ』のなかのラーマを神の化身とする記述、『ハリヴァンシャ』などにみられるこの神の顕現態の列挙などである。つづいてグプタ初期の頃に、『ハリヴァンシャ』にはクリシュナの生涯をその誕生から一貫して描くクリシュナ物語が挿入され、ここにクリシュナ神話の原型が成立した。

このように、戦いと王位継承をめぐる英雄詩として始まった叙事詩は、武人・詩人の手からバラモンに渡って神話・伝説の集大成かつ倫理の書という性格を強め、さらには神格化された英雄たちを称える信仰の書へと変化していった。最初に述べたように、両叙事詩はこの後もさらに発展し、その伝承は地方に分岐してさまざまな地方伝承を包摂していくが、その性格がさらに変化することはなかった。

『マハーバーラタ』

『マハーバーラタ』は全一八巻とその補遺である『ハリヴァンシャ』から構成される。このうち古層にあたるのは、第四巻(ヴィラータ王の巻)の大部分を除く、第二巻(集会の巻)から第一二巻(寂静の巻)の発端部までのうちで物語の展開にかかわる部分であり、なかでも戦争の巻と呼ばれる第六巻から第九巻はしばしば最古層と考えられている。ここに語られるバーラタ戦争、すなわちクルの地でのパーンダヴァ・パンチャラ連合軍とカウラヴァ軍との戦争は史実に基づいているのではないかといわれており、その場合その戦争は、前一〇〇〇から前八〇〇年頃に想定される。しかし、現時点ではその史実性を証明するだけの十分な資料はなく、発掘調査も成果をあげるにはいたっていない。

以下に、古層となる物語の概要を述べよう。バラタ族(クル族)の従兄弟であるパーンダヴァ五兄弟とカウラヴァ百兄弟はクル国を分割して統治していたが、パーンダヴァの長兄ユディシュティラはカウラヴァの長兄ドゥルヨーダナに賭博に招かれ、敗れて王国のすべてを失い、妻を辱められる(集会の巻)。賭博での敗北の約定として、五兄弟と彼らの共通の妻であるパンチャラの王女ドラウパディーは、一二年間を森で過ごす(森林の巻)。身をやつして一三年目を過ごし、約定を満たしたのち、約定に従いパーンダヴァ兄弟はカウラヴァ兄弟に王国の半分の返還を求めるが、カウラヴァ兄弟は拒否、調停も失敗し、両者はおのおの北インド各地の部族と同盟し戦争の準備を始める(努力の巻)。つづく四つ巻では、クルの地での一八日間の戦闘が語られ、カウラヴァ軍の司令官の名にちなんで順に、ビーシュマ、ドローナ、

カルナ、シャリヤの巻と呼ばれる。シャリヤが死んだのち、パーンダヴァの次兄ビーマが棍棒戦でドゥルヨーダナを殺し、ここにパーンダヴァ軍の勝利が決定的となる(シャリヤの巻)。生き残ったカウラヴァ軍の戦士アシヴァッターマンと他の二人はパンチャラー軍への夜襲をしかけ、パーンダヴァ兄弟を除くパーンダヴァ・パンチャラー軍の戦士たちを虐殺する(サウプティカの巻)。両軍の女たちが戦場で男たちの死を悼むなか、カウラヴァ兄弟の母はクリシュナを呪い、ユディシュティラの母は彼にカウラヴァ軍の戦士カルナがじつは彼の兄であったことを告げる(女性の巻)。嘆きと怒りで即位を拒むユディシュティラを兄弟たちと一族の長老たちが説得し、彼はハステイナープラで王位に就く(寂静の巻)。

この古層の物語に中層として付加されたのは、バラタ族の系譜に始まり、パーンダヴァ兄弟とカウラヴァ兄弟の誕生、パーンダヴァ兄弟とドラウパディーの結婚にいたるまでの経緯を語る最初の巻、およびユディシュティラが王位に就いてからクリシュナ一族とパーンダヴァ兄弟が死ぬまでを描く第一四巻から第一八巻である。また前述のように、神話・伝説、聖地巡礼の記述が全篇にわたって挿入され、とくに森林の巻は著しく増大した。こうした挿話のなかでもっとも有名なものとして、「ナラ王物語」をあげておこう。このような挿入はこの時期以降ずっとつづき、どの部分がいづ頃挿入されたかを決定するのは難しい。さらに寂静の巻には、臨死のビシシュマがユディシュティラに説くダルマをめぐる膨大な教説が、王法品、非常時品、解脱品として付加され始める。王族の系譜などを語る『ハリヴァンシャ』の古層が成立し、補遺として付加されたのもこの時期であろう。

クシャーナ期からグプタ初期頃の新層と考えられるのは、森での一二年間の隠遁ののち、パーンダヴァ兄弟とドラウパディーが身分を隠してヴィラータ国で過ごす一三年目を描く第四巻(ヴィラータ王の巻)の大部分と、寂静の巻にさらにビシシュマの教説を付加した第一三巻(教説の巻)である。また前述のように、『バガヴァッド・ギーター』などのバーガヴァタ信仰を説く部分や『ハリヴァンシャ』中のクリシュナ物語も、おそらくこの層に属するだろう。

八世紀頃からのち、法典文献中でのダルマをめぐる議論において、『マハーバータ』は権威として引用されるよう

になる。これはこの叙事詩がダルマの書として、とくに強い影響力を發揮したことを示すものであろう。

『ラーマヤナ』

『マハーバーラタ』と同じように、『ラーマヤナ』の場合にも、中核となるラーマ物語が史実を背景としているのかどうかがつねに議論的的となってきた。しかし、ラーマ物語はバーラタ戦争よりもさらに空想的な要素が強く、史実に基づく可能性はより低いだろう。伝統的にも、『マハーバーラタ』が「かつて起こったこと」を語るのに対し、『ラーマヤナ』は「最初の詩作品」と見なされてきた。主要な地名を現実の場所に同定できるかどうかもまた問題となっている。現アヨーディヤーがラーマの都として聖地と見なされるようになるのは中世以降のことであり、この町を『ラーマヤナ』に語られる古代コーサラ国の首都アヨーディヤーと、安易に同定することはできない。また羅刹の王ラーヴァナの都があるランカー島は、伝統的に現在のスリランカと考えられているが、『ラーマヤナ』に見られる地理上の知識は北インドからデカン高原北部までであり、現実のスリランカがこの叙事詩で想定されていたと見なすのは困難である。『ラーマヤナ』のランカーをデカン北部の特定の地に求めようという試みもなされてはいるが、十分な説得力をもつにはいたっていない。

『ラーマヤナ』は全七巻から成り、批判校訂版に復元されたグプタ初期の頃のテキストはおおよそ三段階をへて成立したとされる。まず古層に属するのは、第二巻から第五巻のなかの物語の展開にかかわる部分である。以下に物語の概略を述べておく。アヨーディヤーの王ダシャラタは老いて長男ラーマに王位を譲ろうとするが、ラーマの異母弟バラタの母の画策によって、バラタを後継とし、ラーマを一四年間森に追放せざるをえなくなる。失意のうちにダシャラタ王は死に、バラタはラーマを王位に就けようとするが、ラーマは生前の父の命に従い都を去る(アヨーディヤーの巻)。ラーマは妻のシーターと弟の一人のラクシュマナとともに、森でバラモンたちを羅刹の害から守りながら暮す。一四年の

蟹居も終りに近づいた頃、シーターに横恋慕した羅刹の王ラーヴァナが、彼女をランカー島の自分の都へ誘拐する(森林の巻)。シーターの行方を探すラーマとラクシュmanaは、兄に王国と妻を奪われた猿王スグリーヴァとその家臣ハヌマーンに会い、協約を結ぶ。ラーマの助力でスグリーヴァは兄を倒し、ラーマは彼をキシキンダーの王位に就ける(キシキンダーの巻)。シーターの捜索に四方に散った猿たちのなかで、ハヌマーンはランカーに幽閉されているシーターを見つけ、ラーマの伝言を伝えて帰還する(美の巻)。ラーマは猿軍とともにランカーに侵攻する。激戦のすえラーヴァナを倒し、彼の弟の一人でラーマに与したヴィヴィーシャナをランカーの王位に就ける。シーターは火の神判で自らの貞節を証明する。ラーマは妻と弟とともにアヨディヤーに帰還し、即位する(戦いの巻)。

第二期には、以上の物語のなかに詩的な叙述が挿入され、これはときには古層のテクストを改変することになった。またさまざまな神話、伝説が挿入された。第三期には物語の前史と後史が付加された。前史は、ラーマを長兄とする四兄弟の誕生とラーマとシーターの結婚を中核とする第一巻(少年の巻)である。主としてラーマが王位に就いてからのできごとを語る第七巻(後の巻)はかなり大部であり、後世には『ラーマヤナ』後篇として、本篇と対をなす独立した作品のように扱われることもあった。

この巻は『ラーマヤナ』の形成史を考えるうえで重要なので、内容を簡単に述べよう。即位したラーマは、シーターのラーヴァナとの不貞を疑う風評に苦慮し、妻を王国から追放する。彼女はヴァールミキ仙の隠棲所で、ラーマの息子クシャとラヴァを出産する。ある遠征の帰途、ラーマは二人がヴァールミキのつくった『ラーマヤナ』を詠唱するのを聞き、彼らを息子と認める。シーターは二人の息子をラーマの許に残して、自身は大地の女神に抱かれ、姿を消す。

この後篇は、前述のように、クシーラヴァと呼ばれる遊歴詩人集団がラーマ物語の形成・伝承にかかわっていたことを示唆するが、同時にヴァールミキを『ラーマヤナ』本篇の作者とする伝承がすでに確立していたことを示してい

る。また、『ラーマヤナ』の中核となる物語部分は、『マハーバーラタ』のそれと比べて内容、文体に一貫性があり、ラーマ物語を現『ラーマヤナ』の古層のかたちに作品化したのが一人の特定の詩人であった可能性は、一概には否定しきれない。しかしこの問題については研究者の意見が分かれ、いまだ決着を見ていない。

ヴィシュヌの化身としてラーマを神格化する記述は、この第三期の層にはじめてあらわれる。その結果として、『ラーマヤナ』もまた英雄詩から信仰の書へと性格を変えることになるのだが、『マハーバーラタ』とは異なり、『ラーマヤナ』は英雄詩としての本来の性格を失うことはなかった。両叙事詩ともに、南アジアのみならず東南アジアの文化にも大きな影響を与えたが、現代インド諸語への翻案の数や影響力を比べても、人気の点では『ラーマヤナ』は『マハーバーラタ』をはるかに凌駕している。

『マハーバーラタ』から「プラーナ」へ

『ハリヴァンシャ』の古層は、宇宙の創造や人間の始祖などを語る伝承(プラーナ)を作品化したものであった。ことにグプタ期以降、『マハーバーラタ』の粹物語や言語、韻律をほぼ踏襲し、ヴィヤサを作者と仮定した、「プラーナ」と呼ばれる膨大な文献群が近代にいたるまでつくられつづけた。この文献は大別して、ヴィシュヌを最高神とするものとシヴァを最高神とするものに分けられ、その目的はおのおのの信仰に基づく世界観、生き方、社会規範を一般の信者に提示することにあつた。そのため内容は本来のプラーナ伝承からじきに神話の集成へと変化し、さらに宗教的色彩の濃いダルマ文献の性質もかね備えるようになった。

叙事詩やシヴァ系、ヴィシュヌ系のプラーナに語られたヒンドゥー教的世界観に対抗し、ジャイナ教でもプラーナと称する文献群がつけられたが、ここではジャイナ版のラーマ物語、クリシュナ物語やジャイナの聖者たちの物語が語られている。中世以降はリージョナリズムの進行とともに、プラーナやマーハーハートミヤという名で、特定の地域や主たる

聖地の神話的歴史を語る作品が多数つくられている。

2 説話文学

『大説話』の成立

南アジアは説話の宝庫である。説話は本来口承で人びとのあいだに長く受け継がれてきたものであるが、その一部は集められて、サンスクリット語や数種のプラークリット語(文学言語となった中期インド・アーリア語)で作品化された。ヴェーダ文献や叙事詩が、バラモンとクシャトリアという社会の上層部のエートスを伝えるのに対し、説話からは、その作品化の段階では上位階層の手をへるとはいえ、他の資料では得がたい民衆の生活感、人生観をうかがうことができる。この節では代表的な説話集にのみふれよう。

もっとも重要な作品として、『大説話』(プリハット・カタール)という説話集がある。この作品は現存しないが、この作品に基づいたいくつかの作品が伝えられており、叙事詩と並んで次節に述べる「カーヴィヤ」の主題の重要な源泉であった。この作品は、グナーディアによって中インドのヴィンディア山中にてパイシャーチー語でつくられたと伝えられているが、この伝説にどの程度の史実性があるかは定かでない。文学作品中の言及などによると、六世紀頃までには『大説話』という名の作品が成立していたようである。ピシャーチャ(食人鬼)の言葉の意味するパイシャーチーという奇妙な名の言語については、詩論書などに言及されているが他にこの言語で書かれた作品はなく、実体は不明である。この作品から派生した現存の作品群から推測できる限りでは、『大説話』は、大きく三つの物語サイクルから成っていたと思われる。すなわち、ウダヤナ王物語、ウダヤナ王の息子で、ヴィディヤダラという半神族の王となるナラヴァーハナダッタの物語、そして交易商チャールダッタの物語である。元来は別個に発達したこの三つの物語サイクルが

統合されて、この『大説話』が成立したのであろう。その成立に一人の作者または編纂者を想定できるかどうかはわからない。現存する派生的な作品群は、複数の言語、宗教集団にわたり、この作品が広範な民間伝承を背景としていることを示唆している。

この『大説話』から派生した作品には以下のものがある。まずサンスクリット語によるヒンドゥー教の作品として、八〜十一世紀頃に、カシユミールで二篇、ネパールで一篇の説話集がつくられている。このなかでもっとも有名なソーマデーヴァ作『説話の川の家』(カタールサリット・サーガラ)は、別系統の説話集も組み込み、約二万二〇〇〇詩節におよぶ大作となっている。ジャイナ教では、『大説話』はクリシュナの父ヴァスデーヴァの物語として、ジャイナ版の『ハリーヴァンシャ』のなかに包摂された。最古の作品は五世紀頃にマハーラーシュトリー語で書かれたもので、『ヴァスデーヴァの遍歴』(ヴァスデーヴァ・ヒンディー)という題名の独立した作品として伝えられている。他にアプブランシャ語による『カラカンド物語』も関連作である。仏教では、パーリ語による『法句経』の注釈書に関連する説話が伝えられている。一方タミル語文学には、『大説話』と『ウダヤナ王子カーヴィヤ』という二作品がある。これらのうち、サンスクリット語の三篇についてはさまざまな比較研究がなされているが、ジャイナ教、仏教、タミル語の伝承との比較研究はまだ十分にはおこなわれておらず、『大説話』の形成過程を解明するにはこの点が今後の課題であらう。

動物説話の流布

つぎに、もう一つ重要なものとして動物説話にふれておく。動物説話は、初期仏教経典の一部である「ジャータカ」にブッダの前身譚として数多く語られ、また『マハーバーラタ』にもいくつかの説話が語られるが、もっとも重要な作品は、動物説話を王子に処世・政策を教える書という枠組のもとに集めた『パンチャタントラ』(五巻の書)である。六世紀にペルシア語(パフラヴィー語)に翻訳されており、またカウティリヤの『アルタシャーストラ』(実利論)と同じ記述が

あることから、おそらくクシャーナ期からグプタ期のあいだに成立したと思われる。ペルシア語訳は失われたが、この訳本からシリア語、アラビア語に訳され、後者からさらにヨーロッパ諸語に翻訳されて、西洋の説話文学に大きな影響を与えた。一方ジャータカに含まれた動物説話は、漢訳をへて日本にまで伝わっており、南アジアの動物説話は世界の説話文学の歴史上、大きな役割をはたしたといえる。

『パンチャタントラ』の原本はすでに失われてしまったが、地方ごとに分岐したいくつかの伝本、ジャイナ教徒による改作本、『大説話』のカシユミール伝承に含まれるものなどが現在まで伝わっている。これら諸本は、含まれる説話の数や内容、挿物語に多くの相違点があるが、『タントラ・アーキヤーイカー』と呼ばれるカシユミール伝本がもっとも簡潔で、かつアラビア語訳にもっとも近いため、他の伝本より原本に忠実なかたちを伝えていると考えられている。これら諸本のほかに、十世紀頃につくられたナーラーヤナ作の大幅な改作本『ヒトーパーデーシャ』がよく知られている。このほかにも、南アジアではさまざまな説話集がつくられている。ヒンドゥー教系では、『鸚鵡七十話』、『屍鬼二五話』、『獅子座三二話』などが代表的作品である。一方仏教ではジャータカについて、仏・菩薩の前生を語る、「アヴァダーナ」というジャンルの作品群がつくられるが、そのなかでは多くの説話が大乗仏教的な色付けをされて語られる。ジャイナ教では、とくに説話が教化の手段として有効に活用されたようであり、膨大な量の物語や説話集がつくられている。

こうした説話群には、前述のウダヤナ王やチャールダッタのように、好んで描かれ、物語サイクル形成の核となる登場人物がいる。このような説話のヒーローの一人として、説話の民衆性を示すために、女にもてる大盗賊ムーラデーヴァの名を最後にあげておきたい。

3 「カーヴィヤ」とその展開

「カーヴィヤ」とは

この節で扱うのは、サンスクリット語、およびプラークリット諸語とアパランシャ語(ともに文学言語となった中期インド・アーリヤ語)でつくられた文芸的な作品であり、伝統的には「詩人(カヴィ)のもの」を意味する「カーヴィヤ」という名で呼ばれる。カーヴィヤは詩論書では、「分ちがたく結合した(サヒタ)語と意味」であると定義され、意味を伝えることを第一とする論書(シャーストラ)と対置される。ただしカーヴィヤには、両者の役割をかね備えたシャーストラ・カーヴィヤというジャンルの作品群もあり、明確な境界線が引けるわけではない。このカーヴィヤの定義は、言語に拠らず表現を重視する言語作品のすべてを含むものであり、実際に現在南アジアでは、この定義に由来する「サーヒティヤ」という語が「文学、文芸」の意味で広く用いられている。しかし現実には詩論書で「カーヴィヤ」として扱われるのは、特定の韻律群や詩の技法を共有するサンスクリット語やプラークリット語による作品群であり、ここではそうした作品群をカーヴィヤと呼ぶ。

前節までに述べてきた叙事詩や説話文学は、その形成過程において民間の口承を背景とし、またその成立後はさまざまな地方伝本や改作、現代インド諸語による翻案などが示すように、社会の広い層に親しまれてきた。それに対してカーヴィヤは、作者のみならず享受者の側にも、幅広い教養と高度な言語訓練を要求する非常に知的な産物であり、その制作・享受は基本的には知的エリート層に限られていた。カーヴィヤの作者の多くは特定の王に仕えた宮廷詩人として知られており、また王や大臣もしばしば作者として名を残している。作品中の記述などによると、宮廷にはスータ、マーガダ、バンディンなどと称される詩人たちがおり、朝夕、またさまざまな行事や出陣のおりおりに、その場にふさわ

しい詩を歌った。また王勅碑文には、しばしば当該の王とその祖先の偉業を称える、高度な技巧を凝らした詩が刻まれている。

このように叙事詩の時代から中世にかけて、詩人は王宮に不可欠な存在であった。カーヴィヤの素材は、二大叙事詩と『大説話』、およびヴェーダや叙事詩、プラーナ文献に知られる神話からとられることが多かったが、とくに王族の英雄たちの武勲と恋愛はもっとも好まれるテーマである。享受者の側から見れば、こうした文学作品は宮廷や社交の場での洗練された振舞いや恋愛の作法などのモデルを提供し、教育書的な役割もはたしていたと思われる。以上の点から各地の宮廷がカーヴィヤの制作・享受の中心であったことは確かであり、カーヴィヤは、例外はあるにせよ、おおよそのところ宮廷文学と呼ぶことができるだろう。ただし詩の朗誦や劇の上演がおこなわれたのは宮廷に限らず、都会の上流人士や学者のサロン、祭日の寺院などもその機会を提供していたようである。

その多くが宮廷文学であるという点に加え、カーヴィヤの特徴として以下の三点をあげておこう。(1)普遍性への志向性、(2)都会性、(3)言語遊戯への嗜好性である。これらの特徴は、タミル古代文学や中世の現代インド諸語による文学と共通する面も多いが、とくに第三の言語遊戯への嗜好性は、伝統的な文法学派などに顕著な言語へのこだわりと関連し、カーヴィヤの著しい特性といえるだろう。

具体的には、カーヴィヤは大きく「聞かれるもの」「すなわち詩と」「見られるもの」「すなわち戯曲と」に分類される。このうち戯曲は劇の台本として演劇の一要素でもあるが、演劇全般は「役者(ナタ)のもの」を意味するナーティヤと呼ばれ、カーヴィヤとは区別される。この区別は、カーヴィヤの詩人が知的エリート層に属するのに対し、役者は下層に属していたという社会状況とも関係するかもしれない。とはいえ、上演を前提とした戯曲を上演と切り離して述べるのは不可能であり、以下では、まず詩と演劇に分けておのおのの特徴を述べたあとで、その形成期から中世初期頃までの変遷を簡単に述べたい。

小詩と大詩

初期の詩は韻文であり、小詩(ラグカーヴィヤ)と大詩(マハーカーヴィヤ)に分けられる。六世紀以降、詩の技法を使った散文作品も登場するが、それについては後述する。言語はサンスクリットが主流であるが、プラークリットの一つであるマハーラーシュトリーも、母音と有声音に富み響きが柔らかいため詩の言語として好まれた。ジャイナ教徒の作品では、アパブランシャも使用される。

小詩は基本的には一詩節が独立した作品となっている。使われる韻律の種類は非常に多様である。このような詩のほとんどは書きとめられず失われてしまう性質のものであるが、一部はなんらかのかたちで詩集として編纂され、現在まで伝えられている。小詩の特徴は、世界・人生の一面を切り取り、比喻や掛詞などの技法、圧縮した表現を用いて、その小さな断面を高密度で表現することにある。

大詩はその内容から物語詩と呼ぶこともできる。数十から一〇〇以上におよぶ詩節から成る章が複数集まって一つの長詩と成り、そのなかで一つの物語が語られる。その物語性では、大詩は叙事詩の後継者といえよう。一方大詩では、叙事詩に比べ物語の展開が遅く、一つ一つの場面が多く、詩節を費やしてさまざまな角度から綿密に描写されることが多い。こうした場面には、日没や月の出など、物語の展開には不要なものも含まれ、詩人の力点は物語を語ることにあり、むしろ個々の詩節に小詩と同程度の密度、完成度を与えることにある。大詩で語られる物語がしばしばよく知られた叙事詩の挿話や神話であることも、筋の展開に煩わされず細部の叙述に力をそぐ傾向に寄与している。

初期の詩論書では、この大詩というジャンルが一作品中に多様な要素を包含できるという理由でもっとも重視されているが、論書中で詩の技法や優劣を述べる際の対象は個々の詩節であり、大詩の物語展開や構成は問題とされていない。描写の濃密さ、その結果としての物語展開の遅さは、散文体の詩や多くの戯曲にもあてはまる。このような点から、小

詩の表現法がカーヴィヤ全般の基礎であり、その本質であるといえることができるだろう。

古典劇とその戯曲

バラタ作と伝えられる『演劇論書』(ナーティヤ・シャーストラ)や文学作品中に見られる劇の上演の記述、ケーララに現存するクリーヤットタムやカタカリなどの伝統的な劇場から推測すると、演劇は音楽や歌謡、舞踊を含む総合芸術であり、オペレッタのようなものであったらしい。しかし現存する戯曲には、台詞のほかにはごく簡潔な演技の指示を与えるト書きがあるだけで、音楽・歌謡・舞踊を劇中でどのように使うかは、おそらく劇を上演する一座の裁量に任されていたのであろう。カタカリでは女性の役を男性が演じる伝統があり、現在では女性も演ずるクリーヤットタムもかつてはそうであったようであるが、『演劇論書』などの文献には女性に関する記述はない。逆に『遊女の手引』(クッタニー・マタ)には、シヴァ寺院付きの遊女たちの一座による『ラトナーヴァリー』第一幕上演の記述があり、ここでは座長以外はすべて遊女で、男役も彼女たちが演じている。また他の作品には、後宮の女性たちが劇を上演して楽しむ記述も見られる。

演劇の形成過程は定かではない。現存最古の戯曲としてクシャーナ期の作品断片がいくつかあるが、ここではすでに戯曲の形式が完成しており、それ以前の状況についてはほとんど資料がない。わずかな手がかりとして、パタンジャリ作『マハーバーシャ』(パーニニの文法書への注釈、前二世紀頃か)にはクリシュナとカンサの戦いについての一種の絵語りや、シャウヴィカと呼ばれる演劇職能者が言及されており、また座長が「糸を持つ者」を意味するストラダラと呼ばれることは操り人形芝居との関係を示唆する。

戯曲から明らかな古典劇の特徴として、以下の三点をあげておく。まず会話のあいだに詩節が多数挿入される点で、詩節の朗誦または歌唱に劇の主たる魅力があったことがうかがわれる。ただし『演劇論書』によると、言葉ではなく舞

踊や激しい動作を主体とする劇もあったようである。つぎに、登場人物が身分などの役柄に応じて異なる言語を用いる点である。バラモンや王、神格など高位の男性はサンスクリットを話す、女性や身分の低い男性は、役柄に応じてプラークリットのどれか、またはアプランシヤを話す。主要な女性にはマハーラーシュトリーを話すことが多い。第三は、多くの作品でヴィドゥーシヤカと呼ばれる道化役が主人公の友人として登場することである。

古典劇は形式と内容によって、一〇種の正劇と一〇種の副劇に分類されるが、すべての種類に作品が現存するわけではない。もっとも重要なのがナータカといわれる正劇の一種で、王や神、聖仙を主人公とし、叙事詩や神話に取材すること一〇幕程の劇である。ついで重要なのがプラカラナであり、大臣や都市の上層市民を主人公とし、説話に取材することが多いが、純粋な創作も認められている。他には一幕ものの短い劇として、学者やバラモン、出家修行者を風刺する笑劇、遊郭を舞台として一人の役者がさまざまな人物との会話を演じるバーナ劇、挑戦と戦いを主とする劇などがある。

すでに何度か言及しているが、古代の演劇の実態を解明するための最大の資料は、バラタの『演劇論書』である。この作品は演劇に関する百科全書のようなものであり、劇場の作り方から、上演に先立ち舞台を清める儀礼、衣装、楽器、音楽理論、舞踊、歌謡、朗誦、詩の技法、劇の種類、さらにはラサ(日常の感情を昇華した美的情緒、感動)が生じる機制とその種類を論じたラサ論等々を含む。おそらく数世紀にわたって、演劇にかかわる人びとの伝承がしだいに集められて編纂され、伝説上の演劇の始祖であるバラタ仙に託されたのであろう。八世紀頃までにはほぼ現在伝わるようなかたちで成立していたと思われるが、その成立史はまだ解明されていない。まだ信頼しうる校訂版が存在せず、また演劇職能者のマニユアル集的な性質のため難解であり、今後の研究の進展が待たれる。

カーヴィヤの形成期——クシャーナ期からグプタ期へ

現存最古の大詩と戯曲は、クシャーナ朝のカニシユカ王の庇護を受けたと伝えられるアシュヴァゴーシヤ(馬鳴)の作

品である。一方小詩は、パリー語仏教聖典のなかの『スッタニパータ』や『法句経』『僧の偈』(テラー・ガーター)、
『尼僧の偈』(テラー・ガーター)などにその初期のかたちを見ることができている。クシャーナ朝下の作としては、マトリ
チエータによる仏法を称えるサンスクリット語の詩集があるが、カーヴィヤ史において重要なのは、サータヴァーハ
朝のハーラ王が編纂したと伝えられる詩集である。

ハーラの詩集『七百頌』(サッタサイ)はアーリヤーという韻律を使ってマハーラーシュトリー語で書かれた小詩を、
ハーラ王自身の作と伝えられるものも含め、七〇〇程集めたものである。ただし現存する六伝本すべてに共通する詩は
四三〇であり、おそらくこれがサータヴァーハナ期の原型で、もとはたんに『蔵』または『偈の蔵』(ガーハー・コーサ)
と呼ばれていたらしい。その後伝承が分岐して、他の詩が加えられ、九世紀以降『七百頌』が通称となった。内容は田
園風景とそこでの恋愛を主とし、素朴で技巧に凝らないが、一方で一見単純な叙景に見える詩が恋人への秘密の伝言と
なっているなど、表面的な意味をとるだけでは理解できない詩も多い。この点で、この詩集は後述するカシユミールの
ドゥヴァニ派の詩論家たちに好まれた。内容に加えて、アーリヤーという、おそらく中期インド・アーリヤ語で成立し
た韻律を使用することから、ここに含まれる詩の源は民間歌謡に求めてよいだろう。またその内容・表現には、古代タ
ミル語によるサンガム文学の恋愛詩の影響が指摘されている。

アシユヴァゴーシャの真作と確定できるものには、大詩二篇と戯曲の断片一篇、およびわずかに残るおそらく二篇の
戯曲断片がある。代表作である大詩『ブツダの生涯』(ブツダチャリタ)をはじめとして、バラモン出身の仏教徒と伝え
られる彼の作品はすべて仏教の教えを説くものであり、開悟、改宗を中心テーマとしている。彼は明確にカーヴィヤを
仏教の教化の手段と位置づけており、わずかな断片で残る戯曲の一つが、抽象概念を役柄として、仏教の教理を演劇化
した寓話劇らしいことも注目値する。同種の寓話劇では、中世のチャンデーッラ朝の詩人クリシュナミシユラによる、
ヴェーダーンタの教義を説く『悟りの月の出』が名高いが、アシユヴァゴーシャの作品群はカーヴィヤを啓蒙のための

ものとする考え方が初期から根強かったことを示唆する。また大詩のなかで、動詞のさまざまなアオリスト語形を列挙する部分は、のちのシャーストラ・カーヴィヤの萌芽であろう。彼の作品は、言葉の技巧に関しては『ラーマヤナ』の新層より発達しているが、全般的に表現はグプタ期の作品より平明である。形式については大詩も戯曲もグプタ期のものと変わらず、この時期にすでにこれらの形式が完成していたことを示す。

グプタ期には、カーヴィヤ史上最高の詩人と称えられるカーリダーサが登場する。彼の作品を含め、グプタ期の諸作品では言葉の技巧がさらに発達するが、まだ難解にはならず、物語展開の速度と各部分の叙述の密度との均衡が保たれている点に特徴がある。そのため、近現代の研究者はしばしばグプタ期をカーヴィヤの黄金期と見なしている。

カーリダーサとグプタ朝の宮廷との関係は推測の域をでないが、おおよその作品年代と内容から、チャンドラグプタ二世(在位三七五/三八〇頃~四一四頃)の宮廷詩人であったのではないかといわれている。彼に帰される作品は多いが、真作と確定できるのは大詩二篇、戯曲三篇、および物語性を備えた小詩集『雲の使者』(メーガドゥータ)である。さまざまな比喩を使い、思いがけないものを対置する手法はカーヴィヤが得意とするところであるが、カーリダーサはこの比喩の技法に優れ、のちの詩人たちの模範とされた。また俯瞰的な視点からしだいに焦点を主題となる対象に絞っていく、カメラのパンにも似た映像的な手法も効果的に使われている。彼の戯曲三篇はおおの趣向を異にするが、いずれも王を主人公とし彼の恋愛をテーマとするナータカ劇である。

ナータカと並んで重要なプラカラナ劇については、すでにアシュヴァゴーシャの作があるが、グプタ期から六世紀にかけて、優れた作例がいくつかある。まずシールドラカ作と伝えられる『土の小車』(ムリッチャカティカー)は、説話文学で有名なチャールダッタと遊女の恋愛を主題とする。多彩なプラークリット語が使われ、泥棒、賭博、処刑の場面など、劇の楽しさに富む作品である。つぎにヴィシャーカダッタは二篇の政治陰謀劇を残している。従来彼はチャンドラグプタ二世の宮廷詩人と考えられてきたが、現在はマウカリ朝アヴァンティヴァルマン王の詩人という説が有力である。

一篇はマウリヤ朝の創始者チャンドラグプタ王の宰相で、『実利論』の作者とも伝えられるカウティリヤを主人公とし、マウリヤ朝創始期の政治状況を背景とする。もう一篇は断片しか残らないが、チャンドラグプタ二世がラーマグプタの後継者として即位する経緯を扱っている。他に、作者は異なるが文体に共通した特徴をもつバーナ劇四篇も、五〜六世紀につくられた可能性が高い。

この時期のものと思われる小詩集はいくつかあるが、代表的なものはバルトリハリ作と伝えられる処世に関する百頌、恋愛百頌、離欲百頌を集めた『三百頌』である。このような詩集の例にもれず複数の伝本があるが、それらに共通する詩節はおそらくグプタ期に帰すことができるだろう。

成熟期としての六〜八世紀

前述のように、カーリダーサの存在とあいまって、グプタ期をカーヴィヤの黄金期とし、それ以降は技巧に走り創造性が失われていくとする考え方は根強い。しかし伝統的な評価やカーヴィヤの特性を考慮するならば、物語展開の速度や構成の緊密さよりも、技巧を駆使した細部の濃密な叙述を重視する傾向が顕著になった、この六〜八世紀のポスト・グプタ期をカーヴィヤの成熟期と見なすのが妥当であろう。この時期には、伝統的に高い評価を受けた詩人が輩出し、また散文体の詩(あるいは小説と呼ぶべきか)やプラークリット語の大詩など、主要なカーヴィヤのジャンルの作品がでそろった。以下にこの時期の特徴を、主要な作例とともにいくつか列挙しよう。

まず、カーヴィヤの大詩の代表作であるバーラヴィヤ作『キラータとアルジュナ』とマーガ作『シシュパラの殺害』が著され、それ以降の大詩の基本形となった。とくに一つの章をまるごとチトラと呼ばれる、回文や一種の子音だけを使った詩節などの言語遊戯に捧げる慣習をつくった。また一詩節全体に二重の意味をもたせる技巧の多用、筋に無関係な叙景の増加が注目される。バットェの大詩は論書と詩をかねるシャーストラ・カーヴィヤの現存最古の作品であり、

ラーマ物語を語ると同時に、パーニ二文法と詩の技法の実例集となっている。文体は難解ではないが、言語遊戯の別方向への発展と見なせるだろう。マハーラーシュトリー語の作品では、説話などはとくにジャイナ教では古くからつづられているが、この期にはサンスクリット語の大詩に匹敵する、技巧を駆使した大詩がつくられ始める。戯曲では、バヴァブーティ(八世紀前半)の三篇がこの期の代表作であろう。彼の作品の特徴は重厚さ、晦渋さにあり、詩節のみならず、散文の台詞部分にも長く難解な複合語を多用する。

つぎに新しい形式として、散文体の詩がはじめてつくられ、スバンドウ、バーナ、ダンディンという三大詩人が輩出した。文体はいずれも大詩と同様に掛詞などの技巧を駆使し、ときには一つの名詞に数十の比喻をつけることで、一文が数頁におよぶこともある。バーナの作品の一つ『ハルシャの事跡』(ハルシャチャリタ)は、彼が庇護を受けたハルシヤ・ヴァルダナ王(在位六〇六／七～六四六／七)の誕生から即位直前までを主題としたもので、パトロンとなる王の事跡を語る歴史カーヴィヤのはしりである。ダンディンの作品は説話を取り入れ、他の作品よりは語りのおもしろさに比重をおいている点でやや傾向を異にする。

ダンディンは南インド出身ではないかといわれているが、戯曲においてもこの時期、南インドでは異なる傾向があらわれる。七世紀にはパッラヴァ朝の王マヘンドラ・ヴィクラマヴァアルマン(マヘンドラヴァアルマン一世)が笑劇の代表作『酔漢の戯れ』を著し、つづいて八世紀以降には、「トリヴァンドラム劇」と総称されている、共通した文体をもつ一三篇の戯曲がつくられている。これらの戯曲はいずれも表現が平明で技巧に凝らず、また一幕ものの作品を多く含むなど、上演のための便宜が考慮されているようである。実際に、これらの一部は現在まで、古典劇クーリヤッタムのレパートリーとして、ケーララ地方で上演されつづけている。

実作品以外の新しい発展は、まず現存する初期の詩論書がこの時期にまとまってあらわれることである。これらの論書の主たる関心事は、比喩や掛詞などのさまざまな詩の技法の解説と分類、体系化にある。つぎにカーヴィヤ作品に注

釈が書かれ始める。最初の注釈はチトラの章に対するものであり、作品の難解化にともなう必然の結果であろう。この時期以降、作品全体に注釈を著す習慣が定着する。

新しい展開とはいえないが、恋愛をテーマとした詩集としてはカーヴィヤ史でもっとも優れた作品といえる『アマール百頌』(アマールシャタカ)もこの期の作品である。アマールの詩はバルトリハリよりは技巧的であるが、難解ではなく叙情性に富み、多くの詩論集に引用されている。

中世文学の世界へ

九世紀以降のカーヴィヤは、基本的にはこの成熟期の傾向をさらに発展させていく。散文と韻文を混交させたチャンプーという新しい形式が成立するが、これも成熟期に成立した散文体の発展形と見ることができるといえる。新たな展開としては、以下に三点のみをあげておきたい。

まず詩論の発展である。とくにカシュミールでは、八世紀頃から詩論家が輩出し、九世紀末にはアーナンダヴァアルダナが、言葉の意味表示機能の分析を發展させてドゥヴァニ論を確立した。ドゥヴァニとは真意を暗示する機能であり、彼はこれを備えた詩を高く評価し、チトラなどの言語遊戯をもっぱらとする詩を低く見た。またドゥヴァニのなかでも、ラサの暗示をもっとも優れたものとするので、演劇のラサ論と詩論を統合させた。彼の論を受け継いだアビナヴァグプタは、ラサは作品の属性ではなく享受体験の場において成立することを主張し、作品の享受、解釈に積極的な価値を与えた。彼による詩の注釈には、従来の語義・文意の説明を超え、解釈をとおして作品を再創造しようとする意志が感じられる。もう一つ重要なのは、彼が美的体験を宗教的神秘体験と類比して述べたことであり、これは彼自身もその大家であった、当時のカシュミールのシヴァ派神学全般の傾向でもあった。のちのチャイタニヤ派によるクリシュナへの愛(バクティ)とラサ論の融合の先駆ともいえよう。カシュミール外においても、ボージャなど、ラサ論と詩論の統合は

さまざまに試みられたが、こうした詩論の発達は実際の作品にはほとんど影響をおよぼさなかったようである。

つぎは実作品の側での重要な変化で、この頃から南アジア各地で現代インド諸語による文学作品がつくられ始め、カーヴィヤと並存したことである。この新しい文学の影響を示す例として、十二世紀の作品であるが、セーナ朝ラクシュマナセーナ王の宮廷詩人であったジャヤデーヴァの『ギータゴーヴィンダ』(牛飼いきりシュナの歌)にふれたい。ジャヤデーヴァはクリシュナ神と牧女ラーダーの恋を歌うこの作品で、物語の状況を叙述するカーヴィヤ体の詩のあいだに、中世のヒンディー語、ベンガル語文学に見られる、より歌謡に適した新しい形式の詩を登場人物が心情を語る台詞として組み込み、まったく新しいタイプの作品をつくることに成功した。

第三は小詩を多数集めたアンソロジーがつくられ始めることである。このアンソロジーのおかげで、女性詩人など、大作を残していない多くの詩人の作品が現在まで伝わっている。

横地優子